

## VII 津波体験記

## 1 児童文「田老村津浪誌」田老小学校編

①

ツナミ

尋一 岩泉亮子

ワタクシガ、ツナミノバンネテキルト大キナジシシガユレマシタ。ソノ時ワタクシハ、スエサンニシヨハサツテ外ニデマシタ。ジシシガヤミマシタノデオウチノ中ヘハイッテ、キモノヲキマシタ。

ツナミガクルト外ヘデテニゲナケレバナラヌシ、サムイトオモツテ、エリマキヲシマシタ。

ソシテ、火ヲオコシテアタツテキルト、オトウサンガ「ナンダカウミガナツテキルゾ、ミンナ外サデロ山サニゲロ」トサケビマシタ。ワタクシハ、アシダヲハイテハシノトコロマデハセマシタ。

ハシノ上デ、スエサンガ「シヨハサレ」トイッタノデ、マタスエサンニシヨハサツテニゲマシタ。ニゲルトキスエサンハ、ムラカミサンノ、オウチノハウヘ、ハセルノデ、ワタクシハ「ツナミノ時ハ、アカヌマ山サニゲロ」トオバアサンカラキイテキマシタノデ、スエサンサ「ソツチデハナイ、ソツチデハナイ、アカヌマ山ダ」トイッタラスエサハ、ムラカミサンノハウデナイ、アカヌマ山ヘニゲマシタ。

山ヲ、ノボルトキハナンカイモコロビマシタガ、ドコモイタクシマセシマシタ。

山ノ上ニハ、オバアサンダノオトウサンダノオカアサンダノキマシタ。タツコヤンハ、オバアサンニシヨハサツテキマシタ。フヂコハオカアサンニダツコシテ火ニアタツテキマシタ。ソシテ「ネエチャン」トイッテキマシタ。ミンナガ「亮チャンヨクタスカッタ」トイヒマシタ。ムツオバサントツヤオバサンハウシロノ山カラオリテキマシタ。

スエサンハ「亮チャンノオカゲデ、タスカッタ」トイヒマシタ。ワタクシハミンナタスカツテオモシロカッタ。

②

大津浪

尋五 前澤盛治

僕は寝て居た。

「ガタ／＼」と家が動く目をさましてあたりを見た。真暗なので何所も見えない。「いつもの地震では電灯が消えないのに」と思ひました。僕は何か恐い事が出るかと思つてはね起きて服を着た。

まだ「ガタ／＼」と家が動く、ます／＼恐しくなつた。一番上の兄さんが寝巻を着たまゝ、神棚にあるローソク立に火をつけて持つて来た。あたりは急に明るくなつた。弟と兄さんが起きないのでねどこの方を見るとまくらごしに僕の方を見てゐた。一番上の兄さんは「こら、皆起きて服を着ろ」と言つた。弟と兄さんは、はね起きて服を着た。「服を着たらそのまゝ床の中に入つてろ。」と兄さんはそのまゝ表へ出ていつた。まだ「地震」は止まない。

僕たちはとこに入つてないといふとあわたゞしく兄さんが表方からかけて来て「盛治盛三、徳治、津浪だ山さにげろ」と言つた。僕たちは服を着ていたので床から起きるとすぐ靴をはいたり足だをはいたりして三人一しよに表に出た「まさか津浪が」と思ひながら走つた。川村さんの橋の所に来ると人が多くさんいた。横をむくと兄さんが見えない。「兄さんに捨てられたな」と思つて弟の盛三をひっぱつてかけ出した。間もなく郵便局の所に来た。すると弟が石にちまらずに、ころんだ。弟をおこしてひっぱつて走ると。「ガラ／＼／＼／＼バリ／＼／＼／＼」とものすごい音がした。その音をきゝつけた所は山のふもとのであつた。少し安心したが体がふるへていた。弟を引いて山へ上るのはめんどろだと思つて弟を道のいゝ方をやって僕は道でない所を走つた。

すると赤沼の人が提灯をつけて「こつちさ、こう／＼」と言ひながらあるいていた。弟と兄さんが見えなくなつた「二人は死んだではないか」と思つていたらおもはづ涙が出た。僕は声を立てゝ泣いた。

泣いてもしかたがないと思つて赤沼の人達とお稲荷さんの方へ行つ

た。すると青砂里の方で「助けてくれ〜〜」と言ふ声が聞えた。今でも津浪話をするとその声が聞えるやうな気がする。ぼうじ山のてっぺんへ行って火にあたりに行くと言ふと弟がお寺のおかちゃん達と話をしていた。

僕は火にあたった。

兄さんと一番上の兄さんが来たとして「おかちゃんおれがこいらがどうをにがさなかつたら、盛治達は死んだかもしれない」と言った。おかちゃんも。「なあにが〜さんが居れば盛治がどうは死んだかもしれない」なんて話をしていた。お母さんは東京に行つてゐたのでし

僕は誰も死なないので安心した。朝になって弟と兄さんと三人手をつないでおきて来た。墓所の所に来るとはだしの人が多くさんいた。お寺に来て握飯を二つたべた。

間もなくお父さんが中里から来た「お前達はよく助かったなあ」と言つて父は涙をためていた。

父はせなか〜ら餅をたくさん出してくれた。たべながら津浪の話を父におしへた。父はなみだをためてきいていた。

## ③

## 津 浪

尋五 佐々木 隆

がた〜、がた〜と、ものすごい地震がしたので僕はむっくりと床の中からはね起きた。表の戸をがらりと明けて外にでると電気はパツと消えた。

おとうさんが家の中で「こら着物を着ないでどこさ行く」と言ったので、私はすぐ家にはいつてきものをきたその時おとうさんがろうそくをつけたので家の中は少し明るくなった。

私は弟と二人でつなみが来はしないかと思つたので裏の井戸氷がひけたかどうかを見に行つたがなんのかはりもなかった。私と弟はあま

の時は電気はついてゐた。お母さんは「ねたいが何だかおそろしくてねる事が出来ない」といつて誰もねない。ねえさんがちよつと外をのぞいた時である裏のおしのさんがおおきな声で「大っきい浪音がするはせろ」とさはいで居た。

僕は一番先外にはねぬけた。そしたらみんなが山の方にはせてゐたので僕もはせた。田中のとこまではせたら電気がきえた。僕はせいはいはせた学校とお寺の分れ道で隣の清さんがはしつてゐた。

僕が「おうい」とよぶと、清さんも「おい」とよんだ。そして又はした。寺の前の石どうの所に上ると道がわからない、どこだり走つて行く高い所につかつた。後の方ではバリバリと、家がこはれる音、浪の音が聞える。高い山にはひ上つてはすべり、はひ上つてすべると誰だか上の方からひびひびつてくれたのでやつと上る事が出来た。

上ると山に行く道路だったので川向の人だちと、山に上つて行つた。ありやの方で「たすけろ、〜〜」とさけんでゐる声が聞えた。

山の上まで行つたが、僕の家は誰も来ない、死んだかと思ふと、淋しくなつて、山を上つて馬場野のおぢさんの家へ歩いた。雪が山にはあつたので道は分つたが、とても足がつかたかつた。歩いたりはせたりして行くと、山ではとりの声を聞いて馬場野と思つた時はうれしかった。馬場野についたのは夜が明ける頃であつた。その時消防たちがさはいでゐた。

親類の家に行つたら、どこのか人だかはだして足を赤くして火にあつてゐた。僕は此の人も逃げて来た人だなと思つた。親類の人は僕を見ると「よく来た早くはいれ」と言つたので、僕は入つて飯をもらつて食べた、それから火にあたつてぬく〜なつた。

夜がすっかり明けてから、消防だちや親類の人と田老に來たら町がみんな流されてなくなつてゐた。

家の下や道路には死んだ人、やけをした人がうん〜うなつてゐた。僕はたぶん僕の家の人達はみんな死んだと思つて探して山の方へ行くとおとうさんが「隆よく助かつた、お前を探してゐた。お前が居るともう家内全部助かつた」と言つて目になみだをためてゐた。それか

らお父さんについてお母さんや皆の居る山の方へ上って行った。

④

当時の追想

尋六 上花輪聡男

東の空が白んで夜はほのぼのと明けて来ました。救いを呼ぶ声もだん／＼と少くなりました。

昨晚、いやだった今三、四時間前まで立並んでゐた家が影形もなく。見当の付かない所に家が一軒ぼつんと立ってゐたりしました。

「あれが僕の家だとよいなあお父さんもお母さんも喜ぶだらう」と思ったりしました。

あの荒狂った海も忘れた様にのどかで夜中に燃した焚火はきえそうになってゐました。津浪のどかぬ所に親類の在る人達は当分親類の家に身をよせる為に村を出て行きます。僕も花輪の親類の家に行きたいと思つていました。

するとお父さんが来て「お前達は花輪に行け」といひました。そしてお父さんは「おれが街道のよい所まで送つて行くから」と言ひましたのでお父さんの後にたつて熊野神社の坂を下りますとお父さんは「あそこにあるのは死んだ人だからのぼるな」と言ひましたのでよく見ると木とばかり思つてゐたのが死人でした。僕はお父さんは先に来て見てわかつてゐたのだなあと感心しました、少し下ると多くさん火を燃して死にそうな人々をかついで来てあてゝ居ました。其の時又一人が人をかついで来ました。

先から火のそばにゐた一人が「それは子供ではないか」と聞くと「いや／＼大人だが」と答へました。お父さんは火のそばにいた人に「こっちはいかないだろうか」と聞くと「行くにいくでせう」と言つたのでお父さんのあとについて行くと材木などで行くことが出来ずもどつて今度は別の方の道路を廻つて川のある所まで来ましたが、僕が川をはねるはずみに背負つた子供の重さで転んでしまひました。やう／＼其処にあった木につかまって立上りました。

僕の転んだ所まで津浪が来た所で上はこほつて固かった、其の辺に、かんづめが転んでゐたので拾つたが手がつめたいたので投げ捨てた、其の当時は何もいらぬ気持でした。材木や種々のものであつちにまわつたりこつちにまわつたりしてお父さんのあとについて行く、三、四時間の間にこんなになつたのだと思ふと津浪の恐しさが今さらながら感じられました。材木の下で子豚がブウ／＼ないてゐた様子もあわれでありました。

道路のよい処へ来ますとお父さんは「此処からお前達は行けるだらうおれは家のトランク等があるか見て行くから」と云つて戻つてしまひました。

僕とお母さんとお父さんに別れて花輪へ行く道路を向ふから榊屋のおかみさんが、毛布をかぶつて寒そうにして来ました。前おづぼのおぢいさんが「お前さんの家は残つていたつけ」と云ふと榊屋のおかみさんは「どうも／＼と」繰返してお礼をしました。人は其の人からしてもらはなくともお礼をするのが人情だのだと思ひました。途中初五郎君が笑ひながら「おらあ慶市君の家であつて来た」と言つたので「お前の家のお母さんは初ちゃんがゐない初ちゃん死んだつた」と泣いていたつけと話す「え／＼」と言つて走り去りました。

田老村の様子をみに行く人達は僕等にいろ／＼と様子をきいたり亦なぐさめて呉れて有難かつた。越田の大屋の前まで来ると登君のおばあさんが泣きながら「小林の者どもらは死んだつた」と独言を言ひながら僕等の今登つて来た道を下りていきました。やうやく花輪の親類の家について戸をがらりと開くと「ほう今来たか」と親類の人達は僕等の来るのをわかつてゐた様でした。家へ入ると餅を焼いて呉れましたが食ふ気にはなれませんが、津浪の話をして田老がどうして津浪とわかつたか聞いたら隣りのおぢいさんが話した。そしておぢいさんは田老に餅を持って下つてゐたと教えて呉れた、其の中にお父さんが来て「家の物は何もかもない」と言つて家には上らず直ぐに出て行きました。お父さんの落付かない様子を見て僕も何だか落付きませんが、親類の子供は僕に本をもつて来て「読め々々」とせびるので

読みましたが、目ばかりは本にはいっても心は津浪の事で一杯で駄目でした。親類のおばあさんは「津浪が来ないで在郷も、やっぱりよいなあ」と笑ひました晩になってお父さんと青砂里の伯父さんが来ました外は夜警の消防が騒ぎながらまわって歩いてるらしい眠くなって目をこすってゐるとお父さんは「ねろ」と言ひましたので今晩も津浪がと思ひ着物を着てねるとおぢいさんは「古の津浪でさへ此処へはこないよ」と力つけて呉れました。ろばたを囲んで青砂里のお伯父さんは僕のお父さんに「お前さん達は誰も亡くしないから休んどがんせ、僕は亡くしてゐるのでとてもねむれない」と情けなさそうに言つてゐるのを聞いて僕の家では誰も死なゝいから幸福だと思ひました。

四五日と日数がたつても津浪話はやみませんいつまで津浪話が続くんだらうと云ふ人さへありましたしばらくしてバラックが出来て僕等もバラックに移り夜は足袋などはいたままで寝、小さい地震でも家をとび出す始末、僕は生れて始めてこんな苦しい思ひをしました。一生の思い出になるでせう。亦慰問品を送つて呉れた他地方の人達の情けは一生忘れない様心掛けてゐます。

## ⑤

津浪

尋六 牧野アイ

「ガタ／＼／＼」とゆれ出しました。

そばに寝てゐたお父さんがとんきやうな声を上げて「地震だ／＼」と家の人達を皆起して戸や障子を開けて外に出たが又入つて来ました。

けれどもおぢいさんが「なあに起きなくてもいゝ」

と言つて平気で寝て居ました。

するとだん／＼地震も止んできました。

お父さんはそれから安心した様子で火をおこしてみんなをあて／＼くれました。

丁度体が暖つたところにお父さんが「なあんだおかしい沖がなつてきた山ににげろ」と言ひますから私は惣吉を起しました。

お母さんにせんちゃんをそはせて静子と二人で表に出る時おばあさんは火を止めてゐましたしお父さんは「提灯を付けろ／＼」とさはいでいました。

表に出て見ますと町の人々が何にも言はないでむす／＼と山の方へ行くので静子あべといったら「やったおらあ父さんといく」といつて家に入つて行きました。仕方がないから私はだまって家の前に立つて居るとそこへ玉澤さんのとし子さんが真青い顔をして来ましたので二人手をとつて山の方をさして逃げました。

木村さんのへい垣の所で人が沢山こんでゐたので落合さんの方へ行かうとしたけれども又もどつて木村さんのところを人押し／＼やうやくのことで山に逃げ登りました。

山に登つた時土のやうな物が口に入りましたが私はそんなものには平気で笹にとつ／＼／＼赤沼山のお稲荷さんの所まで行くと、みんながもつ／＼／＼登つて行くので私達も、はなれないやうに、ぎつしり手をとつて人の後をついて後山のとっぺんまで上つて火をたいてあたりました。

家の事を思ひ出した時は其の時でした。

私は少し落付いて考へた時お父さんは確に生きて居ると思ひました。

冷たい夜がほのぼのと明けたころみんなの家のお父さんお母さん達は自分のうちの子供達を尋ねにくるのに私の家の人に誰も来ませんでした。

すっかり明るくなったので下に行つて家の人がどこかに居ると思つてあちこち見ましたが誰も私の家の人が居ると教へてくれないし見当りませんでした。其の時私は始めて一人残つたといふことがわかりました。

私は泣きながらお墓の所まで来て火にあたつてゐた人を見たら頭から津浪の水をかぶつてぶる／＼ふるへてゐました。

伯父さんと山こに来た時も小林の人達だけがをしたりお父さんお母さんをなくしたといつて泣いてゐた姿を見ては私もだまって居られなくなつて一しよに泣きました。

其の晩はいくら寝ようとしても死んだ家の人達を思ひ出して一寸も眠られませんでした。

翌日伯父さん達は死体をさがして来るといって出はって行きました。そのとき私は表で下の方を見下しますと、あっちこっちにごろ／＼と沢山の死体がありました。

布団を着たまゝ死んでゐる人もあれば裸になって死んでゐる人もありました。

お昼ころになりますと伯父さん達が来ましたから

「何人見付けたべえー」

と聞いたら二人といたからだれ／＼だかわからなかったので又聞いた、するとお伯父さんは泣きながらお父さんとおぢいさんといって涙を流しました。私からも涙が流れます。母さんや静子はどこに居たのだらうと思ふと、たゞ大声で泣かされました。

二、三日たつて私が外を歩いていたら他の人が静ちゃんがいたっけがといつてきかれました。

私は思はず涙が出て来ました。だん／＼日がたつて何時の間にか死体も岡に見えなくなりました。

私がいつも「口ぐせに伯父さんお母さん達は見えないの」と聞くたびに伯父さんは目に涙をためて「お母さん達はたしかに海に行つたろう」と言ふのでした。私はいつも死体が海から上つたという事を聞くと胸がどき／＼します。私は一人であきらめようと思つてもどうしてもあきらめる事は出来ません。三度々々の食事にもお父さんお母さんのことが思ひ出さして涙が出てきます。

町を通るたびに、家跡に来ると何んだかおつかないやうな気がしますが、近所の人々はアイちゃん何してお父さんをびびって馳せないやう、といつて眼から出てくる涙を袖でふきながら私をなぐさめて下さいます。

私はほんとに独りぼっちの児になったのです。

## ⑥

津浪

高一 榎 キヨ

突然起つた地震に驚いた。

「おや」と思ふ間にひどくゆれ出した。私はどうしたらよいだらうと思つた。けれどどうすることも出来ない私はたゞ神様を念じて「神様どうぞ命ばかりは助けて下さい神様／＼」と一心にお祈りした、其のうちには電気は消えて地震は次第に止んで来た。

地震は止んだけれども、電気がつかない「もしや火事でも起つたではないか」とあとから／＼と心配になって来る。家の人達も誰も津浪が来るものと思はなかつたと見えて津浪のことは何にも言はないで其のまゝ眠ってしまった。そのうちに電気がついたこれは幸ひと思つて私も安心して眠つた。すると隣で薪をわる音がした、他の家ではなにやら話声がしてゐる、其の話声を聞くと何だか気にかゝるけれども家の人達は誰一人、何にも言はない私もだまつてねてしまった。

少したつと、となりのおかあさんが「津浪だ」と叫んだ、私は其の声をきくや否や、直ぐに跳起きて見るともう誰もいない。私は着物をきたまゝ、足袋にひごもかけずにおとうさんの大きなあしだをはいてお山をめぐけて一もくさんに走つた、途中で電気が消えた、くらはは暗し道は人で一ぱいであつた。やうやくのことで山の麓の所まで来ると物凄い音、……ばり／＼のう／＼此の音を聞いた私は津浪つてこんなに恐しいものだらうか、とびつくりした、そしてもう助かるまいと思つた。だが力の及ぶ限り登らうと人にとりすがり木にとつゝいたりして山のなかほどまで来ると小さい弟が、あちこちさまよつて泣いてゐた、弟がこんな所と思つて本当にかわいさうであつた。山へのぼつてから家の人達を呼んで尋ねて歩いたすると家内中無事で安心した。

ありやの人の泣きさけぶ声を聞いてはとてもかはいさうでたまらなかつた、けれどどうすることも出来ない其の時「火事だ」と叫ぶ声があった。山の下をのぞいて見るとたん屋根の軒下から火があふれる程ぼう／＼と燃え出した、火の燃えるにしたがつて「あゝあつ／＼

助けろ〜」と云ふ悲鳴がして来た。これは波に流されて流れ家の下になった人達である水止め火止め、何とかはいさうな人達であらうと涙は自然と流れて来た。火は益々大きくなって杉についたと思ふとぢり〜と音をたて、燃える。女の気の弱い人達は「どうしたらよいでせう、どこに逃げたらよいでせう」と云ってそこで泣いてゐる其のうちに夜があげた。

明けて見れば何と云ふことでせう、昨日まではあれ程の町が僅かなうちにこんなにも、むぎ〜と見るかげもない有様となつて、泣いても泣いても、泣き、れないくらゐです、みんながさとへおりて行くので私もおりて見た。おりると間もなく麓の所に流れた人達がこゝかしてうなつてゐる、消防の人達は一生懸命に看護してゐる、体に綿などをまいてやる戸板などで運んでゐる、これを見た私はたゞ涙が出るばかりでした。

私はこんな悲しい思ひをして、兄さんたちと小田代の親類にいつてやっかいになることになつた。

⑦

津浪

高二 赤沼とし子

三月三日午前二時半頃、家の人達は皆すや〜と眠つて居る時でした。急がた〜がた〜と大きく家がゆれました。私はびっくりして床から起上つたら、お母さんも続いて起きて、子供等を起し着物を着せて居りました。その時は電気はもう消えて居りました。お母さんは色々と注意して、戸を開けたり、何も危くない様にしました。それから間もなく小さい地震が起りました。びっくりした、瞬間電気は又つきました。お母さんは安心した様子で子供等に「電気がついて何も起らないと思ふから、着物を着たまゝで寝ろ」といったので、私も姉さんも子供等も着物を着、襟巻もしたまゝで床の中へ入りました。お母さんは寝ないで家の中を色々と注意して居る様子でした。

少したつたら、家のあたりをむす〜と人の走る気配です。その為

に私は起きて子供達も起し、お母さんと二人外へ出て見ました。お母さんは何回も何回も走る人々に火事だか、何だかを聞きましたけれども、誰も教へないで、たゞむす〜して走りました。遠くの方では火事だ〜と騒ぐ声が、低くかすかに聞こえました。お母さんは気をもやす様にして、家の中へ入つて行きました。

私はその時そばを通る人から「ゆだだ〜」とききました。けれども私は其のわけを知らなかつたので、ゆつくりと家の中へ入つて行つて姉さんに言つたら「それは津浪の事だ、お前達は早く逃げろ」といひながら、私に自分のマントを着せました。

それから私はカバンを持って逃げようとした時は、もう子供達は居りませんでした。お母さんは、先生や兄さんを起しに行つたさうでした。

私はマントを着、カバンを持って裏の山へと逃げました。行く途中暗い為垣根にぶつかつて転びました。起き上つて後も見ずに又駆けて行つたら、今度は堰へ入つて上らうとしても、マントを着たり、カバンを持ったりして居る為に、上る事が容易ではありませんでした。それでマントを脱ぎ捨て、カバン許り持って駆けて行つたら、今度は電信柱の針金にひっかゝつて転びました。又起き上つて駆けて行きましたが、胸ばかりどき〜して、足は中々運ばれませんでした。

山の近くまで行つた時、家の人々を考へ出して、何うなつて居るだらうと心配になりました。けれども戻ることには出来ませんでした。あつちからもこつちからも泣き叫ぶ声、又誰かを呼ぶ声、遠くの方からは家の壊れる様な、わり〜といふ音が、物凄くかすかに聞えて来ました。山へ上つて墓の前まで行つたら、人々が沢山居りました。

私が一番高い所に行くと、多くの人達がたき火をしてあつて居りました。そしてあちこちを見たら八重子と梅子姉さんが、皆と一所に居りました。思はず「ねえさん」と云つたら、私の方を向いて眼には涙を一杯ためながら「誰だと思つたらお前か、よく助かった、お母さん達はどうなつたらうなあ」と一人言の様に言つたまゝ、すゝり泣きをしました。私の眼にも知らず〜涙がぼろ〜とこぼれて、ふいても〜あとから〜とこぼれて参りました。

山からお山の方を見ると一面に火が燃えて、その火の中から片方の手を挙げて「助けろー」と叫んで居るのが見えました。そのかあいさうな事したら、何とも云はれない程でした。どこの人達も涙をこぼさない人はありませんでした。そうして居るうちに夜は段々明けて参りました。

今まで夜が明けるのを待ちかねて居た私達は、早くすっかり明るくなって呉れ、ばよいと思つて居ました。其処へ何処かの人が二、三人来たので「お母さん達は何処に居るか知らないの」と聞いた。「お母さんは見ないが姉さんを見た」さうだったので八重子と梅子姉さんと三人で、家の人達を探しに行きました。お父さんや兄さんは、お墓の前で火を燃して身体をあたくめて居りました。それを見たら何となくあはれに思はれて、たゞ涙のこぼれるだけでした。お父さんは流されたそうで、肘の所が少しはれて来て居て大層痛さうでした。身体も随分ぬれて居たので、梅子姉さんはネンネコを着せてやりました又お母さん、姉さん達を山中探したけれども中々見当りませんので、お寺へ行つて探しました。それでも見えなくて学校に行つたら多くの人達がみんな学校の中へ土足で入つて居りました。私達も中へ入つて、あちこち見たけれども居ませんので、火にあたつて身体を温めました。そしてたう／＼お母さんも姉さんも見えませんでした。

其の晩は小田代の家へ私や子供たち許り行つてとまりました。とても静かでした。川の流れがさら／＼と聞こえるだけでした。床についてからは色々な事が考え出されて、中々眠ることが出来ないで、とうとうそのまゝ夜を明して終ひました。朝になって田老に帰り、子供たちとお寺に行つたら兄さんたちが、「なつ子の死がいを見つけたから行く」と言つたので私も連れられて行きました。行つて見ると、もう二三歩走れば助かるにいゝ様な所で死んで居りました。身体にはむしろをかけて、その上に板があつて「赤沼なつ子」と書いてあつたので分かりました。

顔には砂が一ぱいついて、すねは片っぽうだけ血だらけになつて傷んで居りました、着物はきちんと着て、身体もあたりまへにきれいに

なつて居りました。私が「姉さん／＼」と呼んだけれども息は既になくなつて居たのでした。兄さん達は、ねえさんを板の上に載せてお寺にかつゝで行きました。

私はその日におぢさんと鍬ヶ崎に向ひました。妹の死がいは三日目、お母さんの死がいは四日目に見つけたそうです。とてもかあいさうで、何とも云はれないくらゐだつたとの事でした。

## 2 「北方の児童文集岩手編」 白い国の詩編

〔白鷗4号〕 宮古小学校 尋六（第二十六教室）

大津浪

清水ナカ

いつものやうに空を見てねようとしたが、いつもより星がきれいで、ぎらぎらとかがやいてゐた。ぐつすりねていると、がた／＼とゆれたので、何だらうと思つて目をさますと、不意にお父さんが「地震だ、地震だ」といつて私たちを起した。そして店の戸をかぎではづして「ちやんと着物をきろ」といつたので着物をきて、マントと帽子を手にとらうとした時、電気がきえてしまった。私は「ぼうし／＼」とさげぶと、お父さんが懐中電灯をよこした。家がみり／＼と、こはれさうだ。お父さんが「早く出ろ」といつたので、弟ははだしのまゝ外へにげた。そして「げた／＼」とさげんだので私が長くつを取つてやつたら、すぐはいて私にとつゝいてくるので、弟をひっぱつてにげた。少したつとおとうさんが店のびんをかこつて、外とうをきて私たちのそばへきた。外の人達はたんぜんを着たまゝで、子供をしょつたり、風呂しき包をしょつたりしてにげてゆく。お父さんが「おばあさんの家へいつてくる」といつて、はせていつたので、私と弟は川のほとりに立つてゐると、みんなが夢中になつてお寺の方へ逃げてゆきます。みんなが逃げてゆくのを見るともどかしくて、早くお父さんがくればよいと思つてゐました。どこかの七八才位の女の子が「かあさん／＼」と呼

んでゐるのを見て、つれていってくれたかったが、私達もあぶないのでだまってゐた。近所の人達が川の木を見て「これは、よだだ〜」といっている、向ふの方から「津浪だ〜」といふ大声がきこえてきます。所々で泣く声がきこえたり、お母さんが自分の子供をさがしたりしてゐるのもあります。

夜中の三時頃なのでまっくらやみです。やがてお父さんがきて、「津浪がきたから横町の方へにげろ」といったので弟とゆかうとしたら、足がふるへてはせられませんが、それでもせようとすると、後からくる人達が私たちをさらけようとします。私と弟ははなれないようにしてゐると、とうとう弟が後へゆきました。弟は私を一生けん命よんでゐましたが、こゑが出なくなつたのかきこえなくなりました。その時、お父さんが「何があつても手をはなさないでつれてゆけ」といったことが思ひ出されました。私は恐ろしいのも考へず人をかきわけ後へもどつて弟をさがしましたが見えないので、もとの橋の所へきて見ると、弟はお父さんに手をとられて、ぶるぶるとふるへて立ってゐました。「正夫々々」といふと、お父さんが「どこへいつてきた」といったので「にげていつてきた」といふと「正夫もつてれゆけといったのに」といつてゐました。私がつれていったが外の人達に押されてはなれたといふと、お父さんは「川を見てゐるから、黒田町の方へ上つてゆけ」といつたので、又二人は上へ〜と上つてゆきました。弟は私にぎつしりとつついてはなれません。そして「どこへ逃げるや」といつたので、「お寺へ」といつたら、「早くにげべす」といつた。空を見ると風のない晩で雲一つ見えません。

夜が明けはじめました。カラスの音がきこえてきます。

だん／＼人が帰らうとするので、私は弟へ「かへるか」といつたら「おっかないな」といつて帰らうとしない。もう津浪はこないだらうといつて、みんながかへり出した。

私たちもみんなの帰るあとをついてくると、四方があかるくなってきた。

家へかへつたらお父さんはいなかった。二人でおばあさんの家へい

つて、火を沢山おこしてあたってゐたら、近所の人「そめや工場がぜんめつだ」といつてきました。おばあさんが「だれかケガをなさらないばよいが」といつて心配顔をしてゐます。

そめやさんは私の家の親類です。おばあさんが「お前もいつて、そめやさんの様子を見てこい」といはれたので、弟と二人で家を出た。その途中で弟の友達や私の友達の陽子さんやツエちゃんと一緒になつた。

そめや工場を見たら、何もかも流されて、とても目があてられませんが、残つたのは機械と蔵だけです。材木が沢山積んであつたのが少ししかありません。工場や本宅はどこへいつたか影も形もありません。

それから鎌ヶ崎へ行つたら、道路へ大きな船が流されて上がつてゐます。家も沢山こはれ、海水でよごれてゐました。

帰りに又もとの道を通つてくると、巡査たちがこはれた家へ紙をはつて歩いてゐた。

そここでしてゐるあはれな話が耳にとまつて知らず／＼涙が頬を伝つてきました。そこを通り抜けたら子供が足袋もはかないでぶる／＼ふるへてゐるのを見て、私はこの足袋をぬいでやらと思つてゐたら、いつの間にかその子供が人ごみの中になくなりました。

築地まできた時、ごてん山から朝日が上り初めた。私は初めて朝日の上ののを見ました。だん／＼歩いてくると、ここでも人々がよつて津浪話をしてゐるのできいていたら、そこから藤原へゆく宮古橋がこはされて見えます。大きな船が沢山橋の下に上つて五十間も橋が真中から二つにされたのでとても藤原へは通れません。流された人々はどうなつてゐるか心配でなりません。

家へ帰つてみるとごはんでした。お父さんは「今日はそめやにすけにゆくから学校を早くさがつてこい」といひました。

学校へきたらみんなが津浪話です。この辺で最もひどいのは田老ウラで、お寺・役場・学校だけ残つて五百戸全部流されて、千人も人が死んだ相です。

その日は一時間でお下りでした。家にくると方々から電報が沢山き



てゐます。お父さんは「ミナブ ジ」と返事をやりました。

田老のおばさまも死んだ相です。学校では田老へ学用品・古本・慰問金等を沢山やりました。

後から田老にいつてきた先生に、全滅の有様や死んでゐた人々のことなどをきかせられて、涙がこぼれてなりませんでした。先生も生徒に慰問金を沢山やって呉れた相です。

八日には宮古へ天子様のおかはりに勅使様が御見舞にお出になり、お金を下さったので有難くておそれおほくなりました。

その時町民は町の両側に並んでうやくしく敬礼をしました。

——綴方倶楽部六月号二掲載——（昭和八・三・一〇作）

註

○たんぜん——寝巻

○よだ——津浪

○田老——地名、宮古カラ船デ約一時間カ、ル。三陸第一ノ被害地

○勅使様——大金侍従ノコト

評

綴方倶楽部で千葉先生がとてもくはしく御親切に評をして下さってありますから僕は書きません。

あれをよく読んで考へなければならぬ事をはっきりして置いて下さい。

自分の感じた気持ちの通り書表はされてゐるかといふことは文で可成大事な問題です。

### 3 津波の思い出（文集）昭和8年三陸大津波

#### ① 「伝聞ふるさと津波誌（三陸大津波）」田老町教育委員会

津波体験（昭和8年3月3日）

上町 鳥居甚平（80歳）

#### (1) 地震発生

昭和8年3月3日、自分は是非ある都合で宮古市本町の義兄宅に宿泊していた。

3日深夜（時間不明）突然大きな地震を感じた。室内に立っていることが出来ない様な揺れであった。古老の話を思い出し、柱を背にして立ち、揺れが静まるのを待った。地震の揺れは、それまで体験した事のない激しいものであった。

当時の新聞は、あの地震を激震、または烈震と報じていた。（後日、マグニチュード8.2と聞いた）

恐ろしく長い時間であった。程なくして、下の方で人々の騒々しい声が出て来た。戸外に出てみると、皆口々に「津波だ！津波だ！」と呼び合いながら、各自が提灯を掲げ、或る人は人力車で、（当時は自動車はなかった）若い人は自転車で、常安寺の方向に急いでいるのが見えた。自分は津波の襲来を見るため、みんなと反対方向（宮古川の方）に歩き出した。

自分はこの時、毎春秋に出稼ぎに来る水産加工場に向かって歩いてた。その加工場は、今の市役所の付近に建っていたが第1波では被害がなく、工場主も川を見ていた。工場主が突然大声で叫んだ。「津波が来る！逃げる！今度は大きいぞ！」私も川を覗くと、もの凄い早さで宮古橋付近は特に大きな物音がして、漁船が流れ出すのが見えた。

工場主は、早く逃げろと言いながら駆け出した。

自分も逃げ出した。町内には人の心配があまりなかった。自分が今の宮島本店付近に来た時、第2波が山口川を凄い速さで押し上げて行くのが見えた。

波が引いて、工場に戻った時は、工場内に積み上げてあった魚粕150数俵は、1俵も残らず流失していた。

#### (2) 帰村

時計がなく時刻は不明であったが、夜明けにはまだ時間があると思われた。田老の役場、郵便局等に電話したが不通。工場主には、「田老はだめだから早く帰れ」と言われ、急ぎ工場を後にした。鉾ヶ崎の裏通りは大小の船や、雑物が打ち上げられて通行も大変であった。

下り坂は走りながら急ぎに急いだ。女遊戸おなつべを通ったあたりで檜内の人に出会った。その人の話では「津波はたいした事はないようだが火